

◎二〇一一年春季大会

「6月11日 於・龍谷大学」

【研究発表】

・戦後占領期の関西雑誌文化について

和田崇（立命館大学大学院）

・捨象された存在——笹野頼子『説教師カニバットと百人の危ない美女』論——

泉谷瞬（立命館大学大学院）

・横光利一「日輪」の映画化を考へる

島村健司（龍谷大学）

・幸田露伴「平将門」論

西川貴子（同志社大学）

★支部大会研究発表題目

◎二〇一〇年秋季大会

「11月6日 於・奈良教育大学」

【研究発表】

・プロキノ映画『山宣渡政労農葬』における映像編集に関する考察——京都花やしき所蔵フィルムをてがかりに——

雨宮幸明（立命館大学大学院）

・岡本かの子『東海道五十三次』——〈見ること〉の物語——

久保明恵（大阪府立大学大学院）

・中島敦『夾竹桃の家の女』論——ピエル・ロテイ『ロテイの結婚』との交錯——

杉岡歩美（同志社大学大学院）

・〈殺人〉か〈侵略〉か——安部公房「変形の記録」論——

坂堅太（京都大学大学院）

・高祖保の未刊詩集「独楽」定稿（新資料）をめぐる

外村彰（呉工業高等専門学校）

★支部大会印象記

二〇一〇年度秋季大会印象記

二〇一〇年度の秋季大会は、十一月六日、奈良教育大学で開催された。当日は好天に恵まれ、奈良市内は遷都千三百年祭と正倉院展の催しも重なり、大変な人いきれだった。そんな市街の喧騒とは異なり、会場は多くの出席者の静かな熱気がこもっていた。

前半二本の発表について感想を記す。まず雨宮幸明氏の「プロキノ映画『山宣渡政労農葬』における映像編集に関する考察——京都花やしき所蔵フィルムをてがかりに——」は、

山本宣治の生家・花やしきに残るフィルムを調査し、一般に流布したとみられるヴァリアントの二本のフィルムと比較・検討した。作品成立の事情、ヴァリアントとの場面ごとの比較、当時の検閲への目配り、という丁寧な分析には好感が持てた。しかし分析手続きの順番が前後してしまい、理解するのが困難だっただけでなく、論理に疑問を抱く箇所があった。発表者は花やしき所蔵のフィルムをオリジナルと仮定し、ヴァリアントには編集ミスがあり、作品の時系列が狂っていると指摘した。その一方、発表の末尾で花やしき所蔵フィルムも二度の修復があったとも指摘した。花やしき所蔵フィルムの来歴は確かにオリジナルに近いものかも知れないが、二度の修復・リプリントでフィルムの損傷箇所を切除してしまっている。しかも二度目の修復をした小坂哲人が「順番どおりつなぎおかしきカットを少しけずつ」たとも記しているならば、花やしき所蔵のフィルムも既にオリジナルとしての根拠を失っているのではないか。むしろオリジナルの不在を理解した上での、三本のフィルムの比較を論じる必要があるように思われる。

つづいて久保明恵氏が「岡本かの子『東海道五十三次』——〈見ること〉の物語——」を発表された。語り手である「私」の位相を中心に考察し、「東海道」という〈場〉や作中で引用された古典などをプレテク

ストとして作品を分析する。その分析をもとに、「私」はアマチュアの有職故実家であった「父」の助手から「夫」の助手へ、さらには「夫」の妻へと役割を遂行させられていく中で、「私」の「確固たるアイデンティティを獲得することができなかった」物語だと価値づけられた。ジエンダーポリティクスの立場から論じられたと理解できるが、作品解釈に飛躍があり、やや説得力に欠けていたように感じた。例えば作品末尾で「私」は「夫」との夫婦生活が「二十年となれば何かその中に、大まかに脈をうつものが気付かれる」と述べるが、なぜそれが「ためらいがち」に語られたものであると解釈できるのか。客観的な解釈の指標が必要だと感じた。また「私」自身が語る「自分の独創」性のなさを、アイデンティティ喪失の一つの根拠とできるのだろうか。「私」が「父」や「夫」との関係を東海道の旅や関連する古典になぞらえて語るといふ行為に、すでに「独創」性が含まれているのではないだろうか。「私」の語りによってどこまで信がおけるのか、語り手を相対化する視点も必要であったように思う。

〔田中裕也〕

三本目の発表は、杉岡歩美氏「中島敦『夾竹桃の家の女』論——ピエル・ロテイ『ロテイの結婚』との交錯——であった。（南洋もの）『夾竹桃の家の女』が『ロテイの結婚』を下敷きにしたものであるということ

は従来看過されてきた。また、同じく〈南洋もの〉の『マリヤン』・『真昼』には、ロテイの描いた〈南洋〉に対する中島の違和感が示されている。杉岡氏はこうしたことを実証的に示された上で、『夾竹桃の家の女』と『ロテイの結婚』とを比較し、〈南洋もの〉における『夾竹桃の家の女』の意味を考察された。ロテイの創出した〈南洋〉がもたらす「南洋の甘いローマンス」の幻惑。「夾竹桃」に象徴されるそれを「銀竹」と比喩される「猛烈なスコール」が叩き落とし、「私」は覚醒する。『夾竹桃の家の女』をロテイの「呪縛」から脱却する「私」の物語とし、それを創作における中島の意思の表出と見る杉岡氏の発表は、〈南洋もの〉の新たな読みの切り口を開くものであった。質問者の指摘した漢籍との関連等、継続して検討すべき問題も多いが、それだけに今後の進展が期待される発表であった。

次の坂堅太氏の発表（〈殺人〉か〈侵略〉か―安部公房「変形の記録」論―）は、「変形の記憶」を一九五〇年代前半における安部の一つの分岐点と位置づけるものであった。旧満州生まれの安部が入党した五一年当時の日本共産党は、戦争における〈殺人〉の責任を「階級」問題に帰する路線をとった。そこでは〈侵略〉者としての日本人の責任は不可視のものとなる。安部は五三年発表の「壁あつき部屋」で党路線に沿う認識を示しながら、講演などで

はコロンとしての記憶を語った。こうした党路線と安部の意識との間の齟齬が党批判にまで発展するのは五六年のことだが、坂氏は安部の言説の分析を通じ、その萌芽を五四年の「変形の記憶」に見出した。そこに論点を置いたゆえではあるが、「変形の記憶」自体に描かれた死者や閣下、天皇の肖像についての言及をもう少し聞ければと思ったのは、質問者ばかりではなかったと思われる。

そして、発表の最後は外村彰氏の「高祖保の未刊詩集「独楽」定稿（新資料）をめぐって」であった。戦時下に詩境を深め、注目されつつあった高祖は、一九四四年七月に出征し、翌年一月に外地で戦病死した。出征がもうひと月先であれば、自家版として刊行されたはずの詩集「独楽」。その定稿が遺族から図書館に初めて寄贈されたのは高祖の生誕百年にあたる二〇一〇年の夏である。外村氏はそれをいち早く取り上げ、高祖の詩業として流布する〈未刊詩集「独楽」からの採録分〉との異同を分析し、高祖が発表を望んだ詩の姿が、友情によるとは思われるものの、詩友らに改変されていたことを明らかにした。これは高祖の評伝や書簡集を刊行してきた外村氏ならではの仕事といえ、戦時に思い半ばで散った詩人に対する正当な評価への一里塚になるものと思われる。（野田直恵）

二〇一一年度春季大会印象記

二〇一一年度六月一日、日本近代文学会関西支部春季大会は、龍谷大学大宮キャンパスで開催された。前半の発表は、和田崇氏の「戦後占領期の関西雑誌文化について」と、泉谷瞬氏による「捨象された存在―笹野頼子『説教師カニバットと百人の危ない美女』論―」の二つであった。

和田崇氏は、敗戦後一年以内の、一九四五年後半から四六年にかけての、日本の知識人の間で「文化国家」の建設が叫ばれていた時期に、全国各地で様々な雑誌が発行され、未曾有の隆盛を極めた時代状況について触れた。その上で、日本の武装解除、平和主義と表裏一体の関係を成す文化国家の理念の下、一地方である関西で発刊された様々な雑誌が、発行部数においても、内容においてもいかに中央文壇に対抗しうるものであったかについて考察していった。言及された雑誌は、『文藝復興』、『真日本』、『東西』、『学習雑誌』、『新少年』、『文化人』、『時論』、『詩風土』、『新社会』などである。資料編と題したレジュメには、雑誌の表紙や、解題を付し、非常にわかりやすかった。近代文学の雑誌研究は、現在十分と言えない。特に、地方雑誌の研究はほとんど進んでいなかった。和田氏の発表は、関西の雑誌について、これまでの研究状況を打開するものであり、高く評価できる。GHQの検閲状況についても言及していた。ブラ

巻一号の奥付のゲラと、実際に発行された奥付を資料として提示していた。検閲後、大きく変貌しているが、その理由説明は若干不十分であった。GHQの検閲状況をより深く研究すると、見えてくるものがあるだろう。今後の更なる研究の進展に期待したい。

泉谷瞬氏による「捨象された存在―笹野頼子『説教師カニバットと百人の危ない美女』論―」は、作品中に、「小説発表当時においては時代錯誤とも理解される女性蔑視的な言説」が何故挿入されるのかという疑問に着目し、作品の独自の読みを展開する。泉谷氏は、一九八〇年代に、マルクス主義フェミニズム理論が主婦の被る二重搾取を問題化し、家事労働の意味を再検討させるという大きな成果をあげたが、一方で、捨象されていく問題があったことを指摘した。その捨象されていくものが、本作品で浮き彫りにされていることを示した。〈フェミニズムの陥穽〉を考えさせる作品なのである。様々な女性の立場を捉え、相対化させていくことで、固定的な見方をしないことの重要性が示された。天皇制の問題について言及があったが、〈フェミニズムの陥穽〉とどのように繋がるのか、もう少し明確な説明が欲しかったが、笹野頼子の持つ感性豊かな時代感覚に迫る興味深い発表であった。（増田周子）

後半の二人の発表について拙いな

から印象を記させていただく。

島村健司「横光利一」「日輪」の映画化を考える」は、「蠅」とともに横光の文壇デビュー作といわれる「日輪」の映画化が横光研究において現在あまり重視されていない事に対してのカウンターにしたいと島村氏が発表冒頭で述べられた通り、残存しているわずかな資料（脚本と幾つかの写真だけで映像はまったく残っていないそうである）から、映画「日輪」の意味を問い直すものであった。質疑応答では「日輪」の小説と脚本の差はどのようなものか」や「横光自身が映画化を想定していた可能性について」といった事が問われ、前者については、主役の一人である卑弥呼の描写が映画ではかなり改変されていることから、小説と脚本（映画）の違いや横光の映画への関わり方などについて述べられていた。また後者については「日輪」が最初「小説」として発表されていたものが映画化の後『新選横光利一集』の目次では「戯曲」に分類されている事や、「家族会議」における説明的表現が地の文ではなく登場人物に語らせている事から、映画化した際の効率を考慮しているのではという島村氏の意見があり、横光の映画という当時の最新鋭の芸術に対する距離感がうかがえ、大変刺激的であった。

西川貴子「幸田露伴「平将門」論——「言（ことば）」をめぐる物語——」は、歴史学による将門研究の

進展と大正デモクラシーに代表される民衆運動といった社会的状況が将門のイメージを逆賊から悲劇の英雄へと変化させ、それが露伴の博学によって更に新しい将門像の形成に結びついていくのではないかというところが示された。露伴のいわゆる「史伝もの」について新しい見方を提供するものであり、非常に興味深いものであった。また西川氏は作中に於ける「酒」と「言」の共通性を示しながら露伴の歴史認識や作品の特徴について言及されたが、その点について活発な質疑応答があった。特に「幽状記」との類似性として「男女の物語」を主眼とする将門像がありそれをふまえると「言」に左右される愚かな将門像」は再評価と成り得るのかという問いと、「京」（建前）と「板東」（プライベートな本音）の言葉の差を作品後半で将門が使い分けられなくなっていくことが滅亡と重なっているという指摘は示唆に富むものであった。「天野勝重」

★研究会紹介

主に関西で行われている研究会について、以下の項目順で紹介いたします（順不同）。

- ①会の名称
- ②代表者または事務局等、連絡先の氏名・住所・電話番号等

- ③希望者のための入会案内
- ④その他注意事項

①日中比較文学検討会（母体は「皇學館大学日中比較文学研究会」）

②代表者 半田美永

(handa@kogakkan-u.ac.jp)

③現在、日中の研究者、院生で研究成果の発表会を続けています。メール・郵便等での参加も自由です。ジャンル、時代は問いません。

★会員の業績

（凡例）

著書名：『』
論文名：「」
掲載紙誌名：『』
注記等：（ ）

※関西支部会員の業績のうち、一〇年四月から一一年三月までに発表されたものを収録した。

※各業績に付した番号のうち、①は単行本、②は雑誌・単行本等収録論文、③はその他（研究ノート・書評・口頭発表・項目執筆等）を示す。なお、①は書名・出版社・発行年月の順、②は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順、③はタイトル・掲載書（発表会名）・発行年月（日）の順で記した。

※掲載紙誌の巻号数は省略し、雑誌・単行本は発行年月のみ、新聞・会報等は発行年月日を記した。

※原則として、その他業績の種別、執筆項目等の詳細、編者名・発行所名等は会員の届出に記載のあったもののみを記した。

※著者名・論文名・掲載紙誌名の用字は、会員届出の記載に拠った。

ア行の部

青木亮人

①共著「羊」の描写と「歴史」の現前——『羊をめぐる冒険』と海外文学・映画の関係から——『村上春樹と小説の現在』（日本近代文学会関西支部編）和泉書院 一一年三月

②「道」と「文学」——明治の「庶民教化」と子規の俳句革新について——『国語と国文学』一〇年六月
③「芭蕉二百年忌と「芭蕉雑談」について」『大阪俳文学研究会会報』一〇年十月

②「愛と執着、または起風器——子規と虚子・碧梧桐」『国文学解釈と鑑賞』一〇年十一月
③「明治の椿はいかに落ちたか——河東碧梧桐「赤い椿白い椿と落ちにけり」を読む」『日本文学』一一年一月

②「三森幹雄の「写生」批判」『俳文学研究』一一年三月
③「あの頃、俳句は『円虹』一〇年四月〜連載中
③「批評家達の写生」『翔臨』一〇年四月〜連載中
③「俳諧いまむかし」『氷室』一〇

年四月〜十一年二月

③講演「西東三鬼と新興俳句運動」
『西東三鬼生誕一〇周年記念大会』（読売文化センター主催、追手門学院、大阪城スクエア）一〇年五月十五日

③口頭発表「明治の蕪村調、その実態―俳人漱石の可能性について―」『日本近代文学会春季大会』（於大東文化大学）一〇年五月二十三日

③「あんかるわ」解題・総目次（分担執筆）『戦後詩誌総覧』七卷（和田博文・杉浦静編）日外アソシエーツ 一〇年五月二十五日

③「追悼山田弘子特集 弘子の一句」『俳句研究』一〇年六月

③「喪失と決意―俳人子規の柔らかさ」『子規博だより』一〇年六月

③公開対談「子規と子規以降の俳句史について」『大阪俳句史研究会総会記念対談』（於柿衛文庫、わたなべじゅんこ氏との対談）一〇年六月二十六日

③講演「映像と俳句―機関車からエヴァンゲリオンへ―」『現代俳句夏季講座』（俳人協会・京都コンソーシアム主催、於龍谷大学）一〇年八月七日

③「首」解題・総目次、「犯罪」解題・総目次、「時間」総目次（分担執筆）、「同志社詩人」解題・総目次『戦後詩誌総覧』八卷（和田博文・杉浦静編）日外アソシエーツ 一〇年八月二十五日

③講演「ワシノ文ガ載ツトラン―子規の活字への想いとその意義―」

『夏季子規塾』（於松山市子規記念博物館）一〇年八月二十九日
③講演「昭和初期「ホトトギス」雑詠欄の魅力」『俳句結社「円虹」全国大会』（於鳥取県水明荘）一〇年十月十七日

③ラジオ「ことばの花束 俳句の魅力」エフエムいたみ 一〇年十月二十五日〜放送中

③「ホトトギス」雑詠選集礼讃『秋草』一〇年十二月
③「俳句の魅力」『俳句研究』一〇年十二月

③「聖なる病床―長谷川權著『子規の宇宙』書評」『俳句研究』一〇年三月

明里千章

③「村上春樹現象とは―読者は何を求めて読むのか（あとがきにかけて）」『村上春樹と小説の現在』一一年三月

③「村上春樹出版年譜」『村上春樹と小説の現在』一一年三月

岩見幸恵

①共著『検証島尾敏雄の世界』勉誠出版 一〇年五月

①共著『山頭火徹底追跡』勉誠出版 一〇年五月

①共著『金子みすゞ―永遠の抒情』勉誠出版 一〇年九月

③書評「紹介 柘植光彦著『永井荷風―仮面と実像』」『日本近代文学』一〇年五月

学』一〇年五月

③項目「濃霧（がす）」「旅する心」『有島武郎事典』勉誠出版 一〇年十二月

梅本宣之

①単著『文学・1980年前後（私）の行方』和泉書院 一一年十二月
③書評「山下真史『中島敦とその時代』双文社出版」『昭和文学研究』一〇年九月

カ行の部

木村小夜

②「駆込み訴へ」を読む―山岸外史「人間キリスト記」との接点から―『季刊 ichiko』一〇年十月
②「太宰治「誰も知らぬ」論―（わからなさ）を語り、聴く―」『叙説』一一年三月

③「紹介 斎藤理生・松本和也編『新世紀 太宰治』」『日本近代文学』一〇年五月

工藤哲夫

②「貝の火」の正しい手入れ法―中尾清藏「蛋白石概論（二）」からの考察―（注記・澤井麻妃子との共著。「清蔵」と「概」の字は旧字体。）『女子大國文』一一年一月

②「アンデルセンと早変わり―賢治の周辺―」『賢治研究』一一年三月

熊谷昭宏

③「凶区」一〜一五目次および解題・「試行」一〜二〇目次および解題・「漂泊から」六〜七目次および解題『戦後詩誌総覧』七卷（和田博文・杉浦静編）日外アソシエーツ 一〇年五月

③「位置」一〜一五目次および解題・「時間」（第二次）一三（一）〜一六（四）目次・「熱帯氷河」二目次および解題『戦後詩誌総覧』八卷（和田博文・杉浦静編）日外アソシエーツ 一〇年八月

倉西聡

②「横溝正史「呪ひの塔」「埴俣爵一家」論―長編探偵小説の試み―」『武庫川国文』一〇年十一月
②「横溝正史・翻訳「鍾乳洞殺人事件」、翻訳「赤屋敷殺人事件」論」『日本語日本文学論叢』一一年三月

小林幹也

③評論「美や笑いの形に反転―『老いの歌』わたしの読み方―」『短歌研究』一〇年四月
③シンポジウム・パネラー「伝統文芸の継承と変革―明日の短歌・私の作歌方法―」（コーディネーター、中川昭 他のパネラー、沢田英史、飯田進、江戸雪 兵庫県歌人クラブ主催、県民会館パルテホール）一〇年四月二十九日

（のちにその内容を収録したものが同名にて兵庫県歌人クラブより

小冊子化、一〇年七月三十一)

③評論「共有し得る嫌悪―小野十郎を擁護する」『短歌往来』一〇年十一月

③書評「世界が円寂する時―江畑實歌集『瑠璃色世紀』書評」『玲瓏』一一年二月

③評論「新しい抒情を求めて」『短歌現代』一一年三月

③アンケート「2010年のベスト歌集・歌書」『短歌往来』一一年三月

③評論「冥土の眺め―塚本邦雄と釋迢空―」『近畿大学日本語・日本文学』一一年三月

サ行の部

佐藤秀明

①展覧会図録『川端康成と三島由紀夫 伝統へ、世界へ』執筆・監修 鎌倉市芸術文化振興財団 一〇年十月

②「尊皇と王殺しの思想―三島由紀夫の天皇観について」『越境する三島由紀夫 三島由紀夫研究10』一〇年十一月

②「フエティ・ナルシシズムの〈私〉たち」『述(近畿大学国際人文科学研究所紀要)』一一年一月

②「妻たちの民本主義『兄おとうと』論」『解釈と鑑賞』一一年二月

②「村上春樹の「王殺し」」『村上春樹と小説の現在』和泉書院 一

一年三月

③「私のおすすめ」『毎日新聞』夕刊 一〇年四月二十七日〜毎月一回

③書評「長年の蓄積による書誌の大著―山口基編著『三島由紀夫研究文献総覧』」『國學院雑誌』一〇年五月

③書評「有元伸子著『三島由紀夫物語の力とジェンダー』豊饒の海』の世界」『日本近代文学』一〇年十一月

③「三島由紀夫の時代 生涯と作品」他『別冊太陽 三島由紀夫』一〇年十一月

③「奇蹟が起きなかったという奇蹟―「M」論のために」『東京バレー団「M」プログラム』一一年十二月

須田千里

②「ある姫君の物語―久生十蘭論 V」『国語と国文学』一〇年四月

②「安寿のために―鷗外『山椒大夫』を読む―」『日本文学』一〇年八月

②「幸田露伴『連環記』と『大日本史』」『叙説』一一年三月

③「久生十蘭と泉鏡花」『久生十蘭全集』(月報7) 一〇年七月

夕行の部

外村彰

①『岡本かの子 短歌と小説―主

我と没我と―』おうふう 一一年三月

①共編著『したむきな人々―近代小説の落伍者たち―』龜鳴屋 一〇年八月

②「犀星『名園の焼跡』考―訪問者と秘密と―」『室生犀星研究』一〇年十月

③「文学で伝えたいこと」『数研国語通信 つれづれ』一〇年四月

③「多喜さん漫筆(一)」『ぼかん』一〇年十一月

③「文学書のすすめ」『図書だより』一一年三月

③「藤野さんのご縁」『追悼 藤野一雄さん』(近江詩人会) 一一年三月

③口頭発表「岡本かの子『遺作』考―『女体開頭』『宝永噴火』『富士』の構想から―」『立命館大学日本文学会』一〇年六月

③口頭発表「室生犀星『名園の焼跡』を読む―初出の改稿をめぐって―」『室生犀星学会』(東洋大学) 一〇年十月

③口頭発表「高祖保の未刊詩集『独楽』定稿(新資料)をめぐって―」『日本近代文学会関西支部』(奈良教育大学) 一〇年十一月

友田義行

①共著『踏み越えるドキュメンタリー―日本映画は生きている第七巻』(論文「ドキュメンタリー作家としての勅使河原宏―偶然性という作法」) 収載) 岩波書店 一〇

年十二月

①貴司山治研究会編『貴司山治研究』(占領期・開拓農民時代) 作品紹介「愛染」 収載、企画・撮影・編集・人名索引・作品目録作成) 不二出版 一一年一月

②「日本の炭鉱映画史と三池」『三池 終わらない炭鉱の物語』への応答」『立命館言語文化研究』一〇年十一月

②「目取真俊の不敬表現―血液を献げることへの抗い」『立命館言語文化研究』一一年三月

③口頭発表「佐川光晴と「ままならぬ身体」」『生存学と文学研究会』一〇年六月

③口頭発表「消滅する身体―安部公房『完全映画』とその周辺」『生存学と文学研究会』一〇年九月

③口頭発表「闖入する民主主義―戦後占領と安部公房」『占領開拓期文化研究会』一一年二月

③口頭発表(パネラー)「崇高な声が聞こえる―安部公房文学の現在」『国際安部公房ワークショップ』一一年三月

ナ行の部

内藤由直

①共編著『貴司山治全日記 DVD版』/『貴司山治研究』貴司山治研究会編 不二出版 一一年一月

①共編著『海を越えた文学―日韓を軸として』日本近代文学会関西支部編 和泉書院 一〇年六月

② 「野間宏の抵抗と革命―戦後国民文学論の同時代性―」『社会文学』一一年二月

② 「松下清雄『三つ目のアマンジャク』論―絶望を生き抜くことの痛み―」『立命館言語文化研究』一一年一月

③ 翻刻「松下清雄の長篇小説「三つ目のアマンジャク」について」『立命館言語文化研究』一一年一月

③ 翻刻「松下清雄から西川長夫への手紙(2001年1月26日第二信)」『立命館言語文化研究』一一年一月

③ 翻刻「松下清雄」ユダの裏切り―に関するメモ―ハーバート・クロスニー著「ユダの福音書を追え」への書き込みが現示するもの―」『立命館言語文化研究』一〇年十一月

③ 書評「棚沢健『だからプロレタリア文学』」『図書新聞』一〇年七月三十一日

永渕朋枝

② 「藤村発行の婦人雑誌『処女地』の位置―女性が書く意味―」『叙説』一一年三月

② 「藤村『処女地』の執筆者―補遺、素川絹子」『神女大國文』一一年三月

③ 口頭発表「藤村『処女地』の位置」『島崎藤村学会』一〇年九月二十五日

西尾元伸

② 「泉鏡花『霊象』論―(救出劇)を経て「盲人」の見たもの―」『語文』一〇年六月

八行の部

半田美永

② 「佐藤春夫的「晶子像」」『中国河南師範大学学报』一〇年四月(中文訳 張文宏)

③ 「中国、熊野、そして未来―半田美永教授インタビュー―」『中日交流』一〇年七月(中文訳: 張文宏)

③ 「三重と文学―古代から近代まで―」『解釈』一〇年九月・十月

③ 「研究動向 丹羽文雄」『昭和文学研究』一一年三月

③ 口頭発表「紀伊半島の文化と文学」『早稲田大学オープンカレッジ』一一年六月十九日

③ 口頭発表「子規・逍空・春夫―芸術と人生―」『子規研究の会』(於東京芸術劇場)一一年十一月十三日

③ 解釈学会全国大会シンポジウム: パネラー「三重と文学―古代から近代まで」一〇年八月十九日

ワ行の部

渡部麻実

① 共著『青鞥』と世界の「新しい女」たち 翰林書房 一一年二月

② 「科学で芸術をする『死の素描』

―堀辰雄の初期小説におけるユクトーとポアンカレ―」『国語と国文学』一〇年五月

② 「科学と天使―堀辰雄とジャン・ユクトー―」『日本近代文学』一〇年十一月

③ 書評「戸松泉著『複数のテクストへ樋口一葉と草稿研究』」『昭和文学研究』一〇年九月

③ (翻刻・注)「茅野儀太郎(蕭々)書簡」『阿部次郎をめぐる手紙』翰林書房 一〇年一〇月

渡邊ルリ

② 「一九三〇年北平における不安と模索―中島敦『北方行』論―」『叙説』一一年三月

② 「中島敦『悟浄歎異』と有朋堂版『繪本西遊記』」『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』一一年三月

和田崇

③ 「文学雑誌『東西』解題・総目次・索引」『立命館文学』一〇年十月

③ 「解題: 作家生活の始まりと同伴者時代」ほか『貴司山治研究』(貴司山治研究会編) 不二出版 一一年一月

事務局から

○維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしく願います。

ろしく願います。

○日本近代文学会関西支部編『村上春樹と小説の現在』(和泉書院 二五二〇円)が発売中です。ぜひ、ご一読ください。

○韓国日本近代文学会との共催大会を、十一月五日(土)、韓国外国語大で開催します。

☆関西支部公式ブログ

<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~kansai-amjls/>

今後も、こちらのブログに日本近代文学会関西支部に関する情報を掲載していきます。

日本近代文学会関西支部会報 第十五号
二〇一一年八月三十日発行
発行者・明里千章(支部長)
発行所・日本近代文学会関西支部事務局
〒564-8611 大阪府吹田市岸部南2-1
1 大阪学院短期大学 経営実務科
竹松良明研究室内